

和のインテリアテキスタイル

第1回

なべしまだんつう 鍋島緞通

大妻女子大学 キャリア教育センター

教授・博士(工学) 平井 郁子

1. はじめに

インテリア繊維製品に興味を持ち調査・研究してきた。インテリアといっても私が子供のころとはずいぶん生活様式が変わり、都会のマンション生活などは、洋式と言っても過言でないと思う。しかし、畳や障子、ふすまのある家で育った私にとって、日本の生活様式が減少していくのは、大変寂しく思う。最近、「若い夫婦が田舎の古民家を購入して田舎暮らしをする。」というニュースをよく耳にする。畳・障子の生活は、現代の便利な生活と比べると不便なところも有るが、日本の気候風土に合った生活である。この日本生まれのインテリアテキスタイルを何回かに分けてご紹介していきたい。まずは、日本で最初につくられた緞通『鍋島段通』を取り上げてみた。京都では、「鍋島緞通を何枚持っている」ということで家柄が分かったと言われている高級緞通である。



図1 バジリック絨毯 エルミタージュ美術館
鎌田由美子：絨毯が結ぶ世界，名古屋大学
出版会，図版7（2016）

2. 緞通と毛氈

初めに緞通とは何かを、そして絨毯^{じゅうたん}の歴史を少しだけ見ておきたいと思う。緞通^{たていと}1)は、基布の経糸にパイル糸を手で一つ一つ結びながら、カットして毛房を作って織っていく、絨毯のことを言う。緞通という言葉は、中国語の毯子(Tan-su)から来たといわれているが、いつごろからつくられてきたかは、今も明らかではない。

現存する最も古い緞通は、サンクトペテルブルクにあるエルミタージュ美術館に所蔵されているバジリック絨毯²⁾(図1)と呼ばれるものである。これは1949年にロシアの考古学者が、モンゴル国境のゴルネー・アルタイ山のバジリック溪谷で、スキタイ王族の墓を発掘したときに発見したもので、紀元前500年頃のものとしてされている。ほとんど完全に近い形で保存されている。大きさは1.83m×1.98mと大きなもので、1cm²に約54ノット(パイルの結び)を有する緻密なものであると言われている。

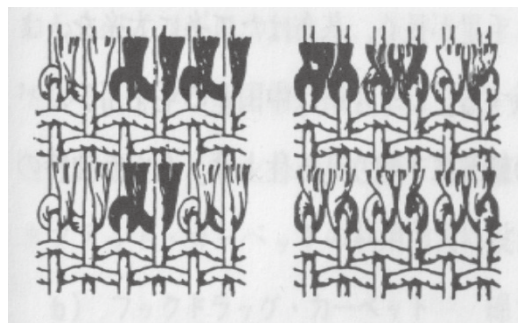


図2 ペルシャ結びとトルコ結び
社団法人日本インテリアファブリック協会調査・人材育成委員会；NIF テキストカーペット，社団法人日本インテリアファブリック協会，P.6（2002）

結び方には、ペルシャ結びとトルコ結び³⁾(図2)があるが、ペルシャ結びであることや、文様が古代ペルシャのアケメネス朝時代のペルセポリス遺跡にあるモチーフに似ていることからペルシャ製だと推定されている。パイル糸を経糸に結びつける緞通は、パイルの厚みによる暖

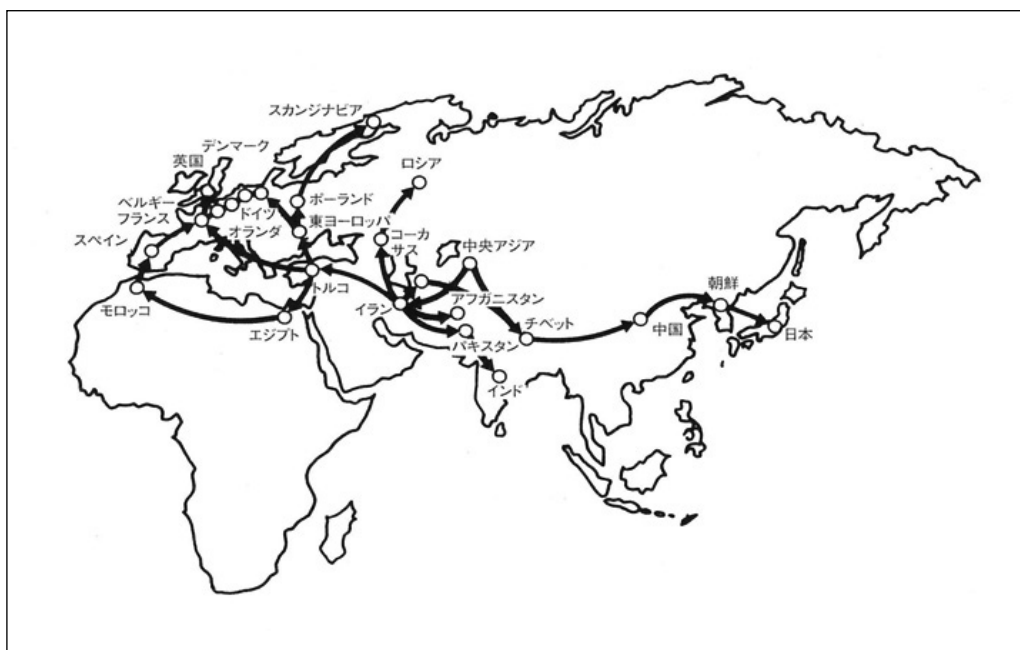


図3 カーペットの伝承図

社団法人日本インテリアファブリック協会調査・人材育成委員会；NIF テキスト カーペット，社団法人日本インテリアファブリック協会，P.61（2002）

かさ、感触の良さを生かしたもので、中央アジアを中心として、インド、中国、ペルシャなどに広まり、各地で独特の発展を遂げていった。

このパイルを結びつける緞通の前には、狩猟生活をしていた石器時代の堅穴式住居で、寒さと地面の湿気を防ぐために獣の皮や、暑さをしのぐために草や木の皮を編んだものを用いていた。農耕牧畜時代になると羊が家畜用に飼育され、その毛を縮絨（繊維の表面にうろこ状の鱗片を持つ獣毛に熱、水分、アルカリを加えると鱗片が開き絡みやすくなる。そこに摩擦力を加えると繊維が絡み合い固まる現象）して、フェルト化した絨毯が用いられていた。その後、厚地の粗い平織やつづれ織りにした織物の絨毯が出てくる。緞通は、このような平面的な絨毯の後につくられた立体的な絨毯である。

日本で初めて用いられた絨毯はフェルトの絨毯の毛氈⁴⁾と言われるもので、『魏志倭人伝』には、239年に魏の明帝が女王卑弥呼に毛氈を送ったと記され、『日本書紀』には、554年百済の聖明王が我が国に毛氈を献上したという記録が残されている。カーペットの伝承図(図3)からも分かるように中国そして韓国を経て日本へ伝承したと言われている。正倉院⁵⁾には、渡来してきたと思われる毛氈(花氈、色氈、白氈)がある。日本で製作されたとい

う記録もあるが、日本は羊の飼育にむかない風土であるため、羊に代わる獣毛を用いたことになる。そのため、大量に生産されたとは考えにくい。そして氈は、はじめ毛を縮絨したものを示したが、後には、糸として織ったものも同じように氈と呼ぶようになる。このためこの氈は、縮絨、織・編を別として、毛を用いた敷物を示すものと推察される。

3. 鍋島緞通の歴史

中央アジアで発達した緞通は、インド、中国を経由して日本に入ってきた。最初は倭寇(13世紀～16世紀)によってペルシャ緞通がもたらされ、その後南蛮人によってトルコ緞通、ペルシャ緞通が贈答品、貿易品⁶⁾として日本に入ってきている。

鍋島緞通の起源説⁷⁾は、明治17年(1884年)に佐賀市嘉瀬町の苗運寺の山門脇の『緞通碑』の碑文に、これらの緞通の由来と伝承が書かれている。(図4)

それによると、元禄時代(1688～1703)肥前国佐賀郡扇町の農家、古賀清右衛門が雇人を長崎に送り、中国人により、敷物の製造方法の技術を習得し、この敷物を『扇町紋氈』と名付け、織り方を伝授したことに始まった